

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

普及啓発・公益増進 部門

| | | | | |
|--------------|-----------------------|----|----|---|
| 氏名又は 団体名称 | ほりえ けんいち 堀江 謙一 | 年齢 | 72 |  |
| 所属 | 海洋冒険家 | | | |
| 功績の概要 | 海洋冒険の経験を活かした海事思想の普及啓発 | | | |

功 績 事 項

- 1962年、氏が23歳の時に約6m足らずのヨットで世界初となる単独太平洋横断に成功。それを皮切りに1974年に小型ヨットで西回り単独無寄港世界一周、1982年に世界初となる縦周り世界一周等、これまで単独太平洋横断に8回、世界一周に3回成功し、また5回の「世界初」を達成。
- 2005年の東回り単独無寄港世界一周の成功は1974年の西回り単独無寄港世界一周と併せて日本人初(世界では2人目)となる東西両方向周り単独無寄港世界一周達成の快挙である。
- ソーラーボート、ウェーブパワーボート等、風力以外の動力によるボート等による単独太平洋横断航海を制覇する他、ビール樽やアルミ缶によるリサイクルボート等、海洋冒険の既成概念を覆すいくつもの単独世界太平洋横断記録を有している。
- これら数々の世界一周や単独太平洋横断に成功し、国内外の海洋冒険家の先駆者として活躍する他、これまでの経験や知識を活かし執筆や講演等、様々な活動を通じて世代を問わず広く国民一般に海の魅力を発信し、海事思想の普及に多大な貢献をしている。



2008年、世界初のウェーブパワーボート(波浪推進船)による太平洋単独横断(ハワイ・ホノルル～和歌山・紀伊水道)に成功した堀江氏



船の祭典 2010(香川県)で講演する堀江氏(2010年)

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

科学技術・学術・研究・開発・技能 部門

| | | | | |
|--------------|-------------------------|----|----|---|
| 氏名又は 団体名称 | こいけ いさお 小池 勲夫 | 年齢 | 67 |  |
| 所属 | 琉球大学監事 | | | |
| 功績の概要 | 海洋物質循環の先駆的研究 | | | |

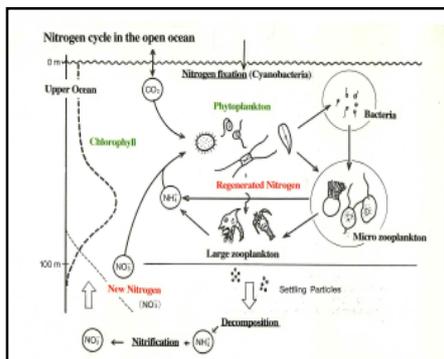
功 績 事 項

1. 主に下記 に代表される多数の研究を通して、沿岸海洋環境の保全の基礎となる科学的な知見の整備に貢献するとともに、地球温暖化をはじめとするグローバルな環境問題と海洋の関わりについての理解の深化に貢献した。

海洋における窒素循環について、特に窒素の安定同位体を用いた実験的手法を駆使して多くの先駆的な研究を行い、沿岸堆積物や表層海洋の窒素循環と生物過程の相互作用に関する数多くの新知見を発表した。

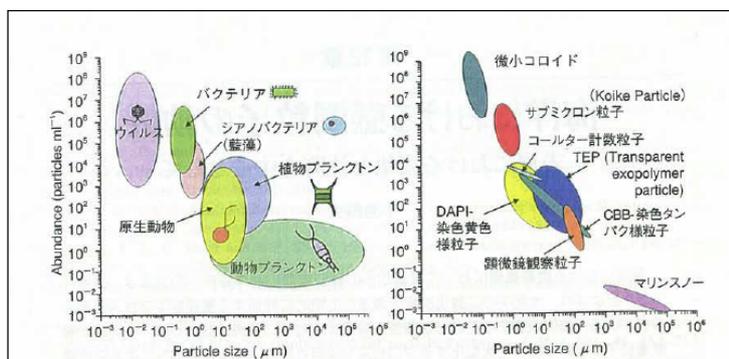
海洋における有機物の動態に関する研究を行い、特に海洋表層における大型コロイド粒子の発見は世界で大きな反響を呼び、これらの粒子に「小池粒子(Koike Particle)」の名称が与えられるなど、海洋の物質循環研究にブレークスルーをもたらした。

2. 日本学術会議、内閣府総合科学技術会議等の地球環境研究関連の委員会の委員長職を歴任し、現在も地球環境観測推進部会会長など、多くの要職を務めている。これらを通して、我が国における環境分野の研究施策の立案・取りまとめにおいて多大な貢献をした。国際学界においても、地球環境研究の国際上部組織である地球圏・生物圏国際協同研究計画(IGBP)の重要ポストを歴任し、国際的な地球環境研究の推進にも精力を注いだ。



海洋表層における窒素循環と生物作用

限られた窒素資源が、複雑な生物作用の中で巧みに再利用されているしくみの解明に貢献。



海洋表層における生物群集(左)と非生物体有機物(右)の数とサイズ分布

右図赤色で示した範囲の大型のコロイド粒子(サブミクロン粒子)を発見、後に「小池粒子」と呼ばれる。

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

地域振興 部門

| | | |
|--------------|--|---|
| 氏名又は 団体名称 | いわてけんりつみやこすいさんこうとうがっこう 岩手県立宮古水産高等学校 |  |
| 所 属 | 岩手県 | |
| 功績の概要 | 地域に密着した水産教育・産業の活性化 | |

功 績 事 項

1. 全国最初の水産を専門とする中等教育学校として創設され、以来多年に渡り水産教育に取り組み続けてきた。当校からは鈴木善幸 元内閣総理大臣をはじめ、産・学・官の各方面に優秀な人材を輩出しており、卒業生は1万数千人に上る。

2. サンマの食用に関する普及啓発に努め、後に三陸が全国随一のサンマ漁基地として発展するきっかけとなるなど、地域漁業振興の礎を築いた。

3. かつては産業廃棄物となっていたサケの骨に着目し、これを利用した「サケの中骨缶詰」の開発に成功した。さらに、地場の未利用資源であるスジメについても商品化に成功、スジメを利用したせんべい、漬け物、アイスなど多様な商品展開を果たした。

さらに商品開発だけでなく、豊かな三陸海の幸を提供するレストラン運営を生徒自らが実施。これらの活動が、各種メディアで積極的に紹介された結果、開発した商品が全国的に普及した。

商品化にあたっては、自治体や地元企業と積極的に協力を進め、地域産業の活性化にも大きく貢献した。



生徒が運営するレストラン「幸富堂(シーフドウ)」
で提供する料理の下準備の様子



生徒によるすじめの店頭販売の様子

1. 海洋立国日本の推進に関する特別な功績 分野

地域振興 部門

| | | |
|--------------|--|--|
| 氏名又は 団体名称 | せとうちこくさいげいじゅつさいじっこういんかい 瀬戸内国際芸術祭実行委員会 | ART SETOUCHI 2010  |
| 所属 | 事務局:香川県観光交流局内 | |
| 功績の概要 | 「海の復権」を目指した国際芸術祭 | |

功 績 事 項

1. 古来、大陸との交易ルートとして海上交通の要路となり重要な役割を果たしてきた瀬戸内海の7つの島（直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島）と高松港周辺を会場に、「海の復権」をテーマとして、島々の美しい景観や個性豊かな生活様式・文化など、島々の魅力を現代美術を通して発信し、国内外から多くの人々の交流を促し、島々の活力を取り戻すために、平成22年7月19日の海の日から105日間にわたり開催。
2. 開催期間中は予想をはるかに上回る93万8千人が来場し、中でも10代から30代の若年層が全体の7割を占める等、若者の海離れが深刻化している現在において海国日本を改めて意識付ける絶好の機会となった。
3. 当芸術祭では日本全国・世界各地から世代・地域を越えた様々な多くの人々が集い、地域の人々と交流することで新たなつながりが生まれ、瀬戸内の島々の地域振興の一助となるとともに、国民の海洋に対する関心を高めるにあたり多大な貢献を果たした。
4. 当芸術祭は2010年を第1回として3年ごとの開催を目指す長期プロジェクトであり、瀬戸内海が「世界の希望の海」となるべく、今後も取り組み続けていく。



大勢の観光客が訪れ賑わいを見せる男木島
撮影：中村 脩



小豆島の美しい棚田風景の中に設置された「わらアート」
撮影：中村 脩

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海洋に関する科学技術振興 部門

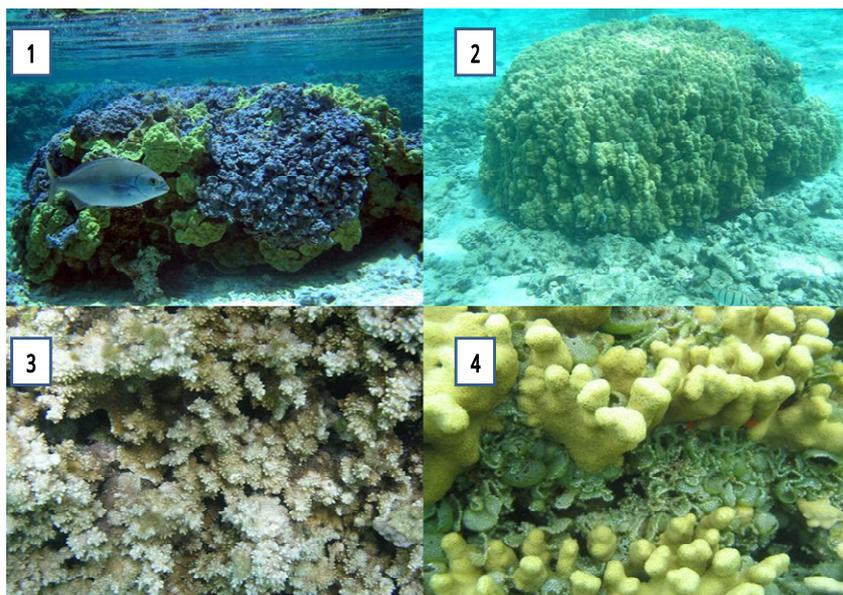
| | | | | |
|--------------|------------------------|----|----|---|
| 氏名又は 団体名称 | すずき よしみ 鈴木 款 | 年齢 | 63 |  |
| 所属 | 静岡大学創造科学技術大学院自然科学研究部教授 | | | |
| 功績の概要 | 海洋の炭素循環やサンゴ礁の研究 | | | |

功 績 事 項

1. 海洋の炭素循環・有機物循環を解明する上で重要となる、溶存有機炭素の測定法の開発・改良の研究を精力的に進めた。この成果は国際的標準手法として推奨され、国際的海洋炭素循環の研究に貢献した。
2. サンゴ礁における世界で初めての有機物循環の研究において、サンゴ礁には従来考えられてきた以上に有機物が蓄積されることを明らかにし、「サンゴ礁は貧栄養海域」という従来の定説に一石を投じた。
3. サンゴの白化の原因について従来報告されていた学説を検証し、サンゴの白化について新たな仮説「高水温とバクテリアによる白化促進によるサンゴ内部での褐虫藻の死滅等」を提唱し、それを検証したほか、世界で初となるサンゴポリプ内部の研究手法を開発し、サンゴ・バクテリア・共生藻類・ビタミン・栄養塩・有機物循環の複合共生システムを検証した。これらの成果は、メディアでも多数報じられたほか、欧米の研究者の注目を集めた。



沖縄で学生にサンゴの生態と特性の説明



サンゴ 健全なサンゴ (1・2)
 白化したサンゴ (3)
 一部白化のサンゴ (4)

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

海 事 部 門

| | | | | |
|--------------|----------------------|----|----|---|
| 氏名又は 団体名称 | よしだ こういちろう 吉田 宏一郎 | 年齢 | 72 |  |
| 所 属 | 東京大学名誉教授 | | | |
| 功績の概要 | 海洋構造物に関する研究開発 | | | |

功 績 事 項

1. 新形式の海洋構造物であった緊張係留プラットフォーム (TLP) の波浪中応答解析手法の開発により、係留索の実用化阻害の最大の原因であった索破断に関する信頼性が確保され、大水深域における TLP の実用化が可能となった。その結果、北海、メキシコ湾等の海底油田開発等に TLP が用いられるようになり、世界の資源・エネルギー開発及び供給確保等に多大な貢献をしている。同手法は、現在においても、海洋構造物の構造解析の安全性評価手法として世界各国の設計基準に反映されており、大水深域における海洋開発を安全面から支えている。
2. 超大型浮体式構造物による海洋空間利用に関する計画・設計の研究は、造船・鉄鋼事業者によるメガフロートの研究開発を推進する原動力となり、海上空港、防災基地等の社会インフラ施設の選択肢として利用可能であることを実証した。これにより、造船産業による新ビジネス分野を開拓するとともに、海洋空間利用を通じた新産業創出の可能性を大きく切り拓いた。
3. 我が国の海洋構造物の第一人者として、東京大学及び東海大学において教育研究活動を通じた教育指導を行うとともに、海洋工学分野での学会の国際交流の重要性を強調され、諸外国の学会をとりまとめて海洋工学に関する国際会議を開催する等、海洋工学分野の技術者の育成にも尽力した。
4. 以上のような長年にわたる海洋構造物に関する研究開発等は、国内のみならず、海外においても高く評価されている。



テンションレグプラットフォーム (TLP)

TLPは1980年代から1000mを超える大水深海域の石油開発に適した海洋構造物であり、現在までに20基が建造されており、設計または建造中のものが3基ある。

2. 海洋に関する顕著な功績 分野

自然環境保全 部門

| | | | | |
|--------------|---------------------------|----|----|---|
| 氏名又は 団体名称 | よこはま やすつく 横濱 康繼 | 年齢 | 76 |  |
| 所 属 | 元南三陸町自然環境活用センター所長 | | | |
| 功績の概要 | 海藻おしばを用いた自然環境教育活動 | | | |

功 績 事 項

1. 現筑波大学下田臨海実験センターにおいて、30余年にわたり海藻の研究を継続。本年3月31日まで、宮城県南三陸町自然環境活用センター所長として、研究や環境教育活動を精力的に実施。海藻学の専門家として環境省自然環境保全基礎調査に長く携わり、調査方針や手法の取りまとめ等を主導。調査結果は過去4回に渡る生物多様性国家戦略や本年3月の海洋生物多様性保全戦略を策定する上で欠かせないものになっている。
2. 海藻おしば作成講習会、磯観察会、シュノーケリングによる海中の自然観察等を実践。自らもNPO団体「南伊豆海洋生物研究会」の会長として、地域に根ざした環境教育を精力的に推進。海域の生物多様性保全の担い手となる多くの市民を育成にも貢献。
特に海藻の色彩の豊かさや美しさを一般の方々に広く知ってもらうため、学術的な目的で行われてきた海藻さく葉標本作製を、誰でも簡単に楽しめる魅力的な「海藻おしば」に変えたことは社会的な貢献として特筆される。
3. また、藻場の重要性や藻場の持つ魅力を広く普及させ、昨年の国立・国定公園における海域公園地区制度導入に影響を与えた。

主な著書

『海藻の謎』(三省堂, 1985)、『海の中の森の生態』(講談社, 1986)、『日本の海』(草土文化, 1993(共著))、『海藻おしば』(海游舎, 1996(共著))、『海の森の物語』(講談社, 2001)、『自分さがしの自然観察 - 私たちはなぜ生きている? - 』(生物研究社, 2011) など



海藻おしばの材料の採集



海藻おしばアート